

『分析形而上学の最前線』×『一元論の多様な展開』合同 WS

大畑浩志 (Hiroshi Ohata)・真田美沙 (Misa Sanada)・高取正大 (Masahiro Takatori)・立花達也 (Tatsuya Tachibana)・米田翼 (Tsubasa Yoneda)

神戸大学、大阪公立大学・名古屋大学・慶應義塾大学・金沢工業大学・大阪大学

本ワークショップは、昨年度末に刊行された二冊の論文集、『分析形而上学の最前線』（春秋社）と『一元論の多様な展開』（晃洋書房）の合同合評会である。『最前線』は、時間や真理といった分析形而上学の主要論点に関して、複数の論者が論争形式で意見をたたかわせた論集である。また『一元論』は、18世紀以降の哲学史における「一元論」の展開をたどる論集であり、近代ドイツ思想から現代の分析哲学に至るまでの多様な一元論思想を浮き彫りにしている。

この二冊はどちらも、英米哲学における形而上学を扱っているという共通点がある。しかし、『最前線』が現代の多様なトピックをヨコに論じる一方、『一元論』はむしろ分析哲学の歴史をタテに掘り下げるという特徴をもち、その点で両書は好対照を成している。本ワークショップは、両書の寄稿者が集まり自らの論文では扱いきれなかった論点を示すことで、近代以降の形而上学がもつ歴史的・トピック的な広がりを探究し提示することを目的とする。

ワークショップの流れは次の通りになる。最初の登壇者である米田と大畑は、現代の心の哲学における主要理論である汎心論 (panpsychism) 内部の一元論と多元論の対立を概観する。汎心論によれば、人や動物だけでなくすべてのものに意識がある。しかしこのとき、素粒子の意識が組み合わさって人の意識ができるのか（多元論的描像）、宇宙の意識が切り出されて人の意識へと分割されるのか（一元論的描像）については意見の相違がある。米田と大畑は、汎心論というよりはむしろ創発主義に与した 20 世紀初頭の一元論者・アレクサンダーの議論を補助線としつつ、一元論的汎心論の可能性と限界を見定める。

二番目の登壇者である真田は、近年のシャフアーやデラ・ロッカらの一元論に関する議論を受けて、特にデラ・ロッカの『パルメニデスの上昇』（2020）と、それに対するコッホの応答「ヘーゲルの〈反対のない学〉へのパルメニデス的下降」（2022）に着目する。コッホはヘーゲル論理学の出発点である純粋存在からの下降の分析に際し、存在を「前景論理」として特徴づけているが、その意味は、パルメニデス的存在だけでなく、アリストテレスの非複合的事物やレードルの「反対のない学」にも関わり極めて重層的である。本発表では「前景論理」の哲学的意義に関して批判的に検討することを試みる。

三番目の登壇者である高取は、シャフアー（および一部の形而上学者）が提出している、存在者としての世界全体こそが全ての真理の（唯一の）truthmaker である、という見解——しばしば truthmaker 一元論の名で呼ばれる——について検討を加える。この議論の文脈において「世界」と呼ばれるものにまつわる不明瞭な点を整理したうえで、

存在者としての世界が **truthmaker** として機能するとはどういうことかを再考する。この考察を通じて、世界を存在者として扱うというアイデアが、**truthmaker** 理論の前提となっている、一種の言語—世界（実在）の二分法に関しても再考を促すのではないかということを論じたい。

最後の登壇者である立花は、哲学史研究における一元論の受け入れ方を検討する。シャプファーが論文「一元論：全体の優先性」で提示した枠組みと、彼がその付録で提示した哲学史の再解釈の試みは、形而上学者だけでなくスピノザ研究者にも議論を促した。とはいえ、彼にしたがってスピノザを優先性一元論者とみなすにせよ、みなさないにせよ、哲学史研究者の側はシャプファーの議論の前提そのものや、それが注目された背景にまでは十分に注意を払わなかったと思われる。それらを再確認したうえでこれまでの比較・接続の試みを反省することで、分析形而上学の議論を哲学史研究に取り入れるための考え方を探りたい。